# 国際交流

異文化を知り、肌で感じることで、あらためて自分の文化を深く理解することができます。
大学生達はホームステイで何を感じたのでしょうか。

## 宇都宮大学名誉教授の働きかけにより始まった

今年で20回目を迎えたグリムの里夏期日本語講習会は、今から21年前（1992年）に、現宇都宮大学名誉教授の橋本　孝氏（とちぎ日独協会会長）のもとに、ドイツのミュンヘン大学より大学生の夏期日本語講習会の開催依頼があり、ドイツと姉妹都市関係にあった石橋町に、橋本氏がその依頼を持ちかけたことがきっかけで始まりました。

同年2月には、既に石橋町国際交流協会が設立されていたこともあり、協会の協力（ホームステイ受け入れ等）もあって講習会開催が実現しました。

以降、石橋町国際交流協会、合併後は下野市国際交流協会の事業として例年8月に開催され、約2週間、ミュンヘン大学生8名程度が参加し、講習会の期間中は下野市内の家庭にホームステイしています。

## 日本の「造る」文化を体験

グリムの里夏期日本語講習会は、今年で20回目となりました。今年はミュンヘン大学生6名（男性4名・女性2名）が参加し、下野市内の家庭にホームステイしながら日本語の勉強日本文化の体験をしました。

8月20日はふくべ細工体験を行いました。下野市特産品のゆうがおの実を使ってお面を作成しました。

21日は益子町まで足をのばし益子焼の手びねり体験をしました。もちろんほとんどの大学生が初体験。教室の先生に指導を受けながら思い思いに作品を仕上げていました。

## 日本の「道」を体験

22日は書道を体験しました。気に入った一文字をうちわに書きました。

このほか茶道や浴衣の着付け、日本料理教室、てぬぐい講座などを体験しました。

大学生たちは、約2週間の下野市での講習を終えた後、東京へ向かい、代々木オリンピック村の宿泊施設を拠点にそれぞれ大学での研修や各地の観光をしました。